

「お嬢様。私（わたくし）と、雪を見に行きませんか？」

「ゆき、」

掛けられた言葉があまりにも唐突で、脳内変換をし損ねてしまった。

ひとつ、ふたつ、瞬き。緩く首を傾げると、笑みを掃いた男の目が尚更穏やかになる。「私と」と言ったそれを示すように胸に片手を当て、綺麗な立ち姿勢で。執事然たる彼は、どうやら、こちらの返答を当然のごとく待っているようだ。

「……雪、」

思わず反芻しながら、ゆっくりと向きを変えた目線の先。動くのに合わせて、つ、と顎先に汗が伝う。

わざわざ確かめたが——やはり確かめずとも、——深い深い青色の空が、今日も長い夏を従えている。

*

[夏、淡彩死]

「あまりに暑い日が続いているものだから、貴方がおかしいテンションになりたいのかと思ったわ」

「んん、そういう表現を使われると強ち間違いじゃなくなるのがですね……」

綺麗に作っていた笑みが、困ったようにふにやりと素の笑みに戻る。

顔を合わせて話しやすいように屈んだ長身。こちらの机に凭れながら「よいしょ」と息吐く様は、先程までの作られた執事スタイルとは程遠く見えるものだ。

この窓際の席は、一際真夏に近い。窓で隔てただけのすぐそこに在るものだから、いくら

涼しく調節された室内とはいえ、教室の中では一番暑い場所であるだろう。

それにしてもである。

「それで、どうしたのです、ハル。折角五月病とやらが治ったのに、また坂月を呼びますか？」

「……緋羽様あのね。素直でいらっしゃるのはいいことですけどね、そんな適当流石に聞き分けてくださいね？ 私が坂月先生に診て頂いたのは、五月病どころか体調不良でもなく、ただの定期検診です」

「あら、やっぱりそうだったのね。毎年のことだもの」

「自分を信じて」

真顔の彼が可笑しい。それに目を和ませれば、はあ、と溜め息を吐くことも。文句のように言いながらも、「仕方が無いな、」と思っているのが伝わってくる。

私を世界一尊い物のように思っているらしい彼は、しかしながら、私がそんな彼をちゃんと愛しい者だと思っているということを、心からは信じる事が出来ないらしい。そういう複雑なところも、可笑しく、愛しいところだけれど。

「ハル。大丈夫ですよ。暑さも楽しむべき四季です。私は、確かに寒さの方が暑さより得意ですが、だからといって暑さを忌避しているわけではないの」

夏は夏の楽しみ方をしなくては。ね。

にこりと笑む。

彼のその気遣いは、長年付き従ってくれているからこそ出来る、私専用のカスタマイズだ。当然、例えば母には母用の、例えば友人には友人用の、人に合わせた適切な気遣いの仕方が出来る。彼の仕事において——最早性格と呼べるだろう——素晴らしいプロだと称賛出来る、それは最たる長所だと思っている。心配を掛けているのは分かるけれど、とても、誇らしく嬉しい。

にこにこしている私に今度は彼が首を傾げながらも、「緋羽様がそう仰るなら」と柔らかく。

その優しさが嬉しくて。だから、思わず今日も口が滑るのだ。

「だから、ハル、ね。『緋羽』と、夏らしいデートでもしましょう？」

「んんんだからですね……！」

そしてそれに相も変わらず困惑する彼が、本当に。

何も、恋情を含んで言っているのではなく。「お嬢様と執事」は仕事柄当然ではあるのだけれど、常にお仕事である必要は全く無いのだから、「学友同士」で遊んでほしいと望んでいるのだ。たまにでもいいから。時々でもいいから。……ほんの少しで、いいから。昔に比べて、態度を軽く崩してくれるようにはなったけれども。

——最初から、誰も、縛り付けてはいないのに。父母も、彼の父母も、私自身も。役目を与えられてはいるけれど、その枠に閉じ込めようなどとは。

「遊びましょう、ハル。私、貴方がお出掛けに付き合ってくれることはとても好きだけれど、『貴方と一緒に』お出掛けしたいのよ」

「……何度も申し上げておりますが、緋羽様。私には、それは過ぎたることなのですよ」

「貴方は一方的に私を大事にしすぎだわ。私だって貴方のことがとても好きなのに、貴方ときたら未だに信じようとしてくれないのだから」

「感受しては、おりますよ」

「知ってるわ。でもそうやって恐縮して、信じてはくれないじゃない。全く貴方って、人に優しくするくせに自分には優しくしないのだから、……酷いわ」

優しさが嬉しく、優しさに傷付く。

苦笑する彼は、しかしながらきつと、そこまで気付いていながら。

だから、

……ああ、暑すぎてテンションがおかしくなりたかったのは、自分だったのかもしれない。無意識に零れ落ちていた。自分がそう呼ぶには、愛称よりも親しいような、——

「……お願いします、悠斗」

「ん`ん`っ、」

「何ですって？」

(攻略法のヒントが見付かった、進歩の日。)

(案外、簡単かもしれない。なんて。)

*

【 夏、淡彩死 】

(淡い色は濃い色に取り込まれる。)

(きみに溶けてしにそう。)

(2,006 文字)